

亡霊が見た夢

あすと

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「貴女に捧ぐ愛の証を此処に」

目次

零落の太陽

キブシ

ルリハコベ

エリカ

クロユリ

不可能の象徴、開花

黎明

残滓

追憶

反芻

憧憬

亀裂

77

69

62

52

43

34

26

18

10

1

締め切った部屋には外からの光や風は届かず、痛いほどの静寂がただ空間に在留している。この閉じた部屋の住民である彼は無感動に天井を眺めている。

「……はあ」

彼は溜息を一つ吐き、俯く。過度のストレスにより色素が抜けた白髪から覗く蒼い瞳は酷く濁り、暗く、冷たい。

自己を構成していたモノの全てを失ってしまったのに、この世界に何故しがみついているのか、きっと彼自身でもよく分からないのだろう。

年季の入ったロッキングチェアを揺らし、リビングの片隅に置いてある埃の被ったグランドピアノに視線を向ける。

その視線に含まれている感情に何一つとしてプラスのものはない。憎悪、殺意、敵意、後悔。ざっと羅列するとこんな感じだろう。楽器の全てが彼にとって憎悪の対象だ。その中でもヴァイオリンは特に忌み嫌っている。その憎悪が殺意に変わるほどに。

だが、処分できていない。この家にあるすべての楽器を彼は捨てれずにいる。グランドピアノだけではなく、ギターやベース、キーボード、電子ドラム、ヴァイオリンも。ど

れもこれも唯見るだけで、とつくの昔に治ったはずの傷口が全てを冒瀆する呪詛の毒で犯されたように痛むのに。

もう一度睨みつけたあと、時計を見る。その針は午前12時過ぎを指しており、約束の時間の少し前だった。

ギイ、と椅子が軋む嫌な音が静謐な空間に反響する。その響きはとても空虚で、どこか悲しい。

椅子から立ち上がった彼はハンガーに掛けてある黒色のパーカーに袖を通し、持ち物を確認する。どうやら忘れ物はないらしく、部屋のドアを開け……ようとするが、踵を返し部屋の机の上に置いてある携帯電話を2つ取る。1つはスマートフォンだが、もう1つは子供携帯だ。しかも傷だらけで、壊れているだろう物を。その2つをポケットの中に突っ込み、部屋を出て玄関のドアを開ける。

「行つてきます」

彼の声に応える者は、誰もいない。



外は雨が降り、四月にしては冷たい風が頬を撫でる。俺の全てが終わった日も雨が降

り風が冷たい日だった。あの一件だけで俺は家族、友人、居場所の全てを奪われた。もうあの場所にはいられなくなったので、態々此処に引っ越してきた。

此処を選んだ理由は、俺の後遺症を診てくれる医師がこの近くの病院にいるという事以外にはない。ただ、出来るだけ穏やかに生きれる街が良かった。そんな俺の願いが叶うかどうかはまだ分からないが。

賑わっているとの噂の商店街は悪天候が原因かなりを潜め、人の通行はあまりない。まあ、意図的に人通りの少なそうな道を選んでいるのも理由だろうが。

雨は空の涙。そんな詩的な言葉があるが、誰の為に泣いているんだろうか。もう二度と泣けない人の代わりに泣いているのだろうか。もしそうだったら、このまま俺達の代わりに泣いていてほしい。もう俺は泣くことが出来ない。どれだけ悲しくても、悔しくても、切なくても俺は二度と泣けない。そして俺の家族も二度と泣けないから。

少し遠くで小学生程度の子供の声がする。子供は嫌いだ。声を聞くだけで胸が締め付けられるような痛みを生むから。その声を意図的に意識から外し、目的地へと足を進める。

降りしきる雨は、まだ止みそうにない。



この辺りで最も大きい総合病院の前に着き、自動ドアをくぐると適当な温度に調節されたロビーがあつた。外気は四月にしては寒い方なので、暖房が少しだけ病院内の温度を上げている。

人当たりの良さそうな職員達がいるカウンターを素通りし、一直線に東棟5階にある外科へ向かう。

明らかに雰囲気が他とは違うドアを開けると、待っていたのは地面に突つ伏している女性だつた。

「……何をやってるんですか、先生。貴方が地面に投げ捨てるのはプライドと女子力だけで十分でしょう。早く起きてください。踏みますよ?」

彼の声に女性はピクリと反応し、起き上がる。目付きは眠たげで、クマができている。華奢な手足はロクに運動を行っていないことを示し、肌は青白い。簡単にいえば幽霊のような女性だつた。

「出会つて一週間しか経っていない私を踏みつけようとするとは随分鬼畜だな、君は」
「話が逸れる前に言いますが、アレは終わりましたか?」

「ああ、当然終わつたよ。奥に置いてあるから取つてくるといい」

「ありがとうございます、先生」

「患者の面倒を見るのが私の仕事だ、気にしないでくれたまえ。それより、痛みには慣れたのかい？」

「慣れましたよ。痛みを噛み殺して日常生活を送れる程度には回復しました」

その言葉と共に彼は立ち上がり、部屋の奥へ消えた。それを見送る先生の瞳は無機質ながらもどこか痛々しいものを見ているようだった。

「慣れた……ね。物は言いようじゃないか。絶え間なく襲いくる激痛に痛覚が麻痺してきているだけだろう？」



「で、君は明日から高校2年生になるだろう？」

「まあ、そうですね。それが何か？」

「難しいことは全部頭から消して楽しんでくれ。来年は受験で忙しいからね。目一杯青春を楽しめるのは今年だけだ。笑って、泣いて、人生の糧にしてくれたまえ」

「……俺にそんなこと出来ますかね」

「きつと出来るさ。私でも出来たことだ、君に出来ないはずがない」

先生は彼の頭を優しく撫でる。それはまるで母親のようで。故に、彼の古傷を扶る。

「……すまない、もうすぐ時間だ。何かあつたらまた来たまえ。ああ、今日はやっていくのかい？」

「いえ、大丈夫です。それでは失礼します」



玄関にある鏡の前で全身をチェックしている彼は相変わらず仮面が張り付いた様に無表情だ。

冷たい光を宿し、汚濁した瞳は盲目であり過去も今も未来も見えていない。通った鼻梁が台無しだ。血が通っていないような白い肌と制服の上からでも分かる線の細さは彼の不健康をよく表している。

それでもいきなり初日から不登校を選択しなかったのは彼にとつてはかなり良い進歩だ。鏡で見た目をチェックし、第一印象に気を使う程度には彼は先生の言う通りの青春を送ろうと努力している。

彼が通うのは羽丘学園。つい数年前までは女子校だった所だ。故に男子生徒の入学者が少なく、比率的には1：4程度だ。そんな状況をどうにかするために手を替え品を替え募集を行ってきたのだが、一向に集まらなかった。丸々半年不登校の彼を受け入れ

るレベルで。

クリアファイルと鎮痛剤しか入っていない軽い鞆、携帯電話、そして傷だらけの子供携帯を持ち、玄関のドアを開ける。

「行つてきます」

やはり返答の声はなかった。



先日の悪天候とは打って変わって雲ひとつない青空が広がっている。その蒼穹に飲み込まれそうな錯覚すら覚えるほど美しい空模様だった。いつそのこと、あの空に溶けていきたい。そうすればあらゆる柵から解き放たれるだろうに。

でも、それができていない。故に何か理由があるのだろう。無意識か無意識でないかは重要ではない。「在る」という事自体が問題なのだ。一体何が俺をこの世界に縛り付けている？

友人……否だ。今の俺には交友関係なんぞ皆無だ。強いて言うなら、千切られた細い糸を持つているだけだ。そろそろこれも捨て去つてもいい頃だろう。そして、忘れ去ろう。

家族……否だ。大切に思うことと縛られる事は違う。俺は俺の意思で生きているのだ。

■……否だ。断じて否だ。そんなことはあつてはならない。これが最後の絆だとしても、俺の存在証明だとしても、絶対にあつてはならない。

では何が理由なんだ？

そんな答えの出ない問いに対して思考を巡らせていると、いつのまにか目的地に着いていた。校門の前には人集りができており、写真を撮る人と会話をする人で溢れかえっている。樹齢数百年はある桜並木が風に揺れ、花卉を空に舞わせている。

ここで俺はちゃんと生きられるだろうか。

ルリハコベ

「キミがアタシの隣の人かな？」

幸せそうな雰囲気を醸し出す校門前をじつと見つめていると不意に声が聞こえた。それが自分に向けられたものと気付くのかかった時間は分からない。

正直無視しても良かったのだが、初対面の人間にそんな事をするのは憚られる。ここはひとつ、穏便に事を済ませておこう。隣人ならばある程度友好的な関係を築けるのが望ましい。まあ、俺が一番望むのは彼女が二度と俺に声をかけない事だが。

そんな事を頭の片隅で考えながら声の主がいると思われる方向に顔を向ける。

「貴女がその席に座るなら、な」

「ふーん……アタシは今井リサ。キミは？」

「……晴人。花崎 晴人。できれば名前で呼んでくれ、名字は好きじゃないんだ」

「オツケー、よろしく晴人！」

「ああ、よろしく」

これが俺の新しい一歩。凡ゆるものを嫌悪したかつての俺と比べると幾分かは進歩

しているだろう。

変化を拒み、友情を唾棄し、絆を噛い、愛を踏み躪り、同情を忌避したあの頃の俺よりは。きつといい方向に向かつてる筈だ。そうは思いませんか、先生。



時刻は凡そ8時30分ほど。もう大半の生徒は己がどのクラスに所属するのかを知り、其々の教室に入室していく。

俺がいるクラスも例外ではない。次々と教室内に人が入り、各々コミュニケーションを形成している。去年のクラスメイト、部活の友人、同じ中学校の人間……人と人を繋ぐ輪は多種多様だ。一週間前にこの街に足を踏み入れたばかりの俺にはそのコネクションがないし、そもそも友人なんて今更望まない。ただ穏やかに生きればいい。これだけが俺の望み。

もう嫌なんだ。家族とか、友達とか。人が嫌いなんだ。

絆で繋がってる？ 友情は大切？ 家族は宝物？ 馬鹿も休み休み言え。何も知らないくせに。そんな事を言えるのは決まって人間関係において成功している奴だ。俺みたいな泥を這い蹲って生きている敗北者の気持ちなんて知らない。

ああ、どうか過去へ連れ出してくれ。今は終わり、未来は閉ざされた。どんなに歪んでいてもいい、間違っていてもいい。だから俺にもう一度チャンスを下さい。今度は上手くやってみせるから。

だから時よ止まれ。そして戻れ。叶わない事は分かっている。それでも、願わずにはいられないから。



始業式、クラス活動としての自己紹介が終わり、生徒が帰路につく中で、彼は一人屋上に佇んでいる。

色素が抜けた白髪が風に靡く。無機質な瞳は盲目を示唆する。張り付いた無表情はまるで仮面^{ペルソナ}。病的なまでに白い肌は幽鬼のようであり、学校指定の制服の上からでも分かる線の細さは彼の不健康さを表している。

「忌々しいな、吐き気がする」

傷だらけの古びた子供携帯の画面を見ながら呟く。その画面に写っているものは

■ ■ ■。平和だった、満ち足りていた、幸せだった。

愛しい刹那を永遠とする文明の利器によって繋ぎとめられた、止められた時間。動き

出すことも、変化することもない。これが彼の心の拠り所。

「僕達は、もう戻れないのかな」

酷く弱々しい声。親とはぐれた子供のような顔。細い体は後悔の念によって震えている。吐露するのは本心。どうしようもないほど歪み、狂った願ひ。誰にも……彼が一番信頼している先生にすら決して言わなかった本音。ずっと隠してきた弱く、半端な、切なく揺れる心。定まりきらない自分。

それは……幽世から怨嗟の声を上げる亡霊のようで。

「やり直せないのかな」

やり直せるわけがない。

「これで終わりなのかな」

ああ、終わりだよ。

「嫌だよ、そんなの」

これはお前が選んだ道だ。その全ての責任はお前に帰結する。

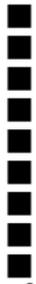
「独りは、嫌だ」

拒むな。

「怖い」

恐怖心なんてものは捨てる。

「……………」

お前は、。決して。永遠に奈落の底で絶叫し続ける。それがお前が犯した罪であり、受けるべき当然の罰であるのだから。

ガチャリ、とドアが開く音がした。それはつまりこの空間内に足を踏み入れた人間がいるという事。

本音は聞かれる訳にはいかない。彼は罪人。悲鳴を上げるのは被害者の方だ。彼は決して叫んではならない。どんなに苦しくても。受ける罰がその身に余るものだとしても。

彼は空つぽの仮面に虚飾で彩られた仮面を被せる。無表情ではあるが、先程の凡ゆる感情が削ぎ落とされたような酷い顔ではない。彼が持てる仮面の中で最も社交的なものである。

「あれ？ 晴人じゃん。こんな所でどうしたの？ もうみんな帰っちゃってるよ？」

「……それはこちらのセリフだ、今井リサ。君こそこんな所に何をしに来た？ 君の友人達は全員帰路についているんじゃないか？」

ギヤル風のファツションに反し、真面目かつ面倒見のいい今井リサがそこに立っていた。隣には小柄な銀髪の子がおり、晴人に警戒を含んだ視線を向けている。

晴人はその少女を一瞥し、リサの方を向く。一応会話をする気はあるようだ。

「アタシは友希那と話に來ただけだけど……晴人は？」

リサの言葉に晴人は少し目を伏せながら答える。まるで何かに怯えるように。

「……ただ、感傷に浸っていただけさ。無意味で、無駄で、無価値な。気にしないでくれ」
その虚飾の裏側にある触れてはいけない十二カに気付いたのか、それとも未知を恐れる本能なのか、リサはそれ以上踏み込むことはしなかった。

「そっか……あ、紹介するね！ この子は友希那。アタシの幼馴染なんだ」

「……湊友希那よ。宜しく」

友希那は晴人に向けて左手を出す。

「花崎晴人だ。可能ならば名前で呼んでくれ、苗字は好きじゃないから」

それに応えて晴人も右手を差し出す。

「……？」

友希那の不思議そうな顔に気が付いたのか、晴人は2人の見えない様に顔を顰める。

「すまない、間違えました」

晴人と友希那は握手をするが、その雰囲気は決して友好的ではない。友希那は晴人を警戒しているようであるし、晴人は何も見ていない。

「あははっ！ 晴人もそんなミスをするんだね〜」

そんな険悪な空気を払拭するためにリサが茶々を入れるが一切の効果を發揮しない。

このままでは無言の時間が続き、雰囲気はもつと悪くなる。だが、予想に反して友希那が口を開いた。友希那が気付いたのは、晴人が最も触れて欲しくなかった部分。剥き出しの傷であり、決して癒える事がないもの。未だに彼を縛り付ける鎖。

「……貴方、音楽をやっていたわね？」

「……………どうしてだ？」

その声がドス黒い感情で揺れていたことには誰も気づかない。虚飾の仮面をかぶる前の空白が覗いている。

好奇心は猫を殺す、この状況ではこの言葉がびつたりだろう。友希那は虎の尾を踏むどころか、龍の逆鱗に触れようとしているのだから。

「筋肉とマメのつき方よ。恐らく弦楽器、それも小型の……バイオリンをやっていたんじゃないかしら？ それもかなり長い期間。そして、花崎晴人。最初に聞いた時は分からなかったけど、2年前のコンクールで優勝した名前と同じよね。そして、半年前に表舞台から姿を消し……」

「やめてくれ。これ以上は詮索しないでほしい」

彼は彼女の手を優しく振り解く。その声音も落ち着いており、まるで子供をあやす様である。

しかし、瞳だけは違った。固体化せんばかりに凝った憎悪。これ以上踏み込めば殺す

事も辞さない、と言わんばかりの殺意に溢れた眼。しかし、片目は途轍もないほど無機質だ。そのアンバランスさが友希那の恐怖心を揺さぶる。生物としての本能が警鐘を鳴らす。

「ご、ごめんなさい。知り合って間もないのに踏み込み過ぎてしまったわ」

「此方こそ申し訳ありません。大人気ないことをやってしまつて」

彼の奈落に蓋がされたことを理解し、友希那は肩の力を抜く。どうやらなんとか回避出来たようだ。

「晴人ってバイオリンやってたんだ！ 意外だな」

晴人にその話題を振るのはまずい、と友希那が止めようとしたが彼は冷静に答えた。

「今は殆ど触つてないけどな」

先ほどの殺意も虚無も何もない。至って普通の花崎晴人だった。

一体何がトリガーなのだろうか、そんな事を頭の片隅で考えながら友希那はリサと晴人の会話に混ざつた。

エリカ

時刻は午後6時過ぎ。校内にいる生徒の数は少なく、その殆どが帰宅の為の準備を進めている。

場所は屋上。明かりが皆無と言つても過言ではないような場所である。友希那とリサは少し前に帰路に着き、たった一人しかいない。

鎖で雁字搦めにされ、水底に沈められた憐れな小鳥が、虚しく闇に吼える。怨みの叫びが、罰を求める悲鳴が、天に轟く。

「ぐっ……ああ……」

彼は焦点が定まらないう瞳で虚空を睨みつける。口からはだらしなく涎が垂れており、呼吸は荒い。

「がっ……ぐう……はあ……」

握り締められた拳からは血が滴り落ちており、その手にかかっている力の大きさを示している。皮膚が破れ、肉が裂ける激痛すらも意識に留まらないほど、彼を襲っている別の痛みは強かった。

「ぐっ……うう……」

その痛みを別の痛みで上書きしようと、コンクリートでできた床を力任せに殴りつける。普通ならば床に一切の影響を及ぼさず、その行為は無意味に終わるはずだ。しかし、ただの一撃でコンクリートに蜘蛛の巣状のヒビが入り、滴り落ちた血の雫が夜空に毒々しい華を咲かせている。

「ああつ…………ツ……………」

それでもまだ足りない。この忌々しい激痛を掻き消すには。他の痛みが時間の経過と共に薄れていくのに対して、この痛みだけは尚鮮明だった。

全身に呪詛の毒が駆け巡る。絶え間なく襲い来る激痛が痛覚以外の五感の全てを機能不全に落とし込み、世界から音が、色が、香りが、感覚が消える。

「相…………変わらず…………この痛み…………には…………慣れない…………な…………」

自嘲するように呟く彼の声は、虚しく空に溶ける。

覚束ない手で鞆からボトルに入った鎮痛剤を取り出し、片手から溢れる程の量を口に放り込む。その数は少なく見積もっても15錠。あの薬の正確な服用量は分からないが、それでも基準値よりは大幅に多い事は簡単に見てとれる。

「…………畜生…………」

彼の呟きが空に溶けたその時、ガチャリとドアを開ける音が静寂な空間に響く。

「こんばんわ、花崎晴人くん。ご機嫌はいかがかな？」

風に翻る白衣、月明かりに照らされた青白い肌、隠せていないクマ。運動不足故に細くなった手足。

「診察時間になつても来ないと思つたら……一体君はこんな所で何をやっているんだい？」

先生がいつまで経つても来ない患者病人を迎えにきた。その声音に嘲笑を伴つて。

「先……生え……」

ハア、とため息を一つ吐き、先生は激痛に藻掻いている彼をじつと見つめる。

それを晴人は焦点の定まつていない瞳で見つめ返す。

「……全く、面倒な患者だよ、君は。現代テクノロジーがないと生きる事が出来ないのに、定期的に摘出しないと身体を激痛が蝕むのに何故拒むんだい？」

心底理解できない、とも言いたげに呟く先生はコンクリートに蹲っている晴人の視線に合わせる為、しゃがみこむ。

「何、別に負い目を感じることはないさ。君が生きていることを咎める人間はいない。そもそも、そんな権利は誰も持つていない。それに君は何を勘違いしているのか知らないが、生存することは悪ではないよ。それが生物の命題であり何よりも達成すべき目標だからね」

その声は先程のような冷たく引き離すようなものではなく、子供に語りかけるような

優しさをはらんだものだった。

しかし、その声音が、その内容が、その態度が、彼の神経を逆撫でする。

「それで、どうするんだい？　行くのか、行かないのか。私はどっちでもいい。行かないと言うのであればどうぞご勝手に。好きなだけ激痛に溺れていたまえ。幸い人は少ない上に時間帯は夜だ。私が君を見なかつた事にし、屋上のドアを締めればそれでおしまいだ。君の自慰行為を止める者も咎める者もない。朝まで存分に耽っていたまえ」

そこで一度言葉を区切り、先生は彼を値踏みするかの様に見つめる。

「行くのであればこの手を取れ。君の主治医として、君の痛みを取り除こう」

「さあ、どうするのかね？　行くのか、行かないのか」

「逃げるのか、逃げるのか」

「……」

彼の道は、1つしかなかった。



蛍光灯の明かりが簡素かつ無機質な室内を照らす。

室内にはキーボードを叩く音、ペンを走らせる音、機械音のみが響く。騒々しい院内

から隔離されたこの場所は、大凡の人が足を踏み入れるのに躊躇する。それもそのはず、腕は確かだが人間性が終わっている曰く付きの医師のトリトリに誰が好んで足を運ぶのだろうか。実際、此処に来る人間は先生を除けば晴人だけだ。その晴人も、用事があるとき以外は可能な限り入らないようにしている。

「さて、気分はどうかね？」

人を食ったような笑みで、物言わぬ人形のようにベッドに横たわっている彼に話しかける。その声音は心底愉快そうで、先生が人として終わっていることを否が応でも再認識させられる。

「痛みは収まりましたよ……」

その返事に力強さは無く、倦怠感に溢れていた。そして彼は相手にするのも面倒と言わんばかりに背を向ける。

「おや？ 釣れないね。もう少し私の話し相手になつてくれよ。終わるまでまだ時間があるだろうか？ その間私は患者の元を離れる訳にはいかないし、君も暇だ。win—winの関係じゃないかね？」

「貴女と話すと疲れるんですよ……」

「会話の練習だと思つてくれたまえ。それに君は出会つて数分の人間に殺気を放つたんだらう？ 幾ら彼女が君の琴線に触れたとしても、この対応はあんまりじゃないか？」

彼は「どうしてそれを」と言おうとしたが、すぐに思い留まる。この天災に何を言っても無駄だ。「知っている」という結果がある以上、方法を問うのは無意味だ。

だから、彼は苦し紛れに毒を吐く。

「本当に……貴女は人間として腐ってますね。どうして医師なんてやっているのか。尋問官や拷問官の方がよっぽどお似合いですよ。今からでも遅くないので転職してみては？　好き好んで貴女のような人間に診察されたいと思う患者も少ないでしょうし」

「人間性が腐っているのはお互い様さ」

その毒ですら、あっさりと切り返されてしまうのだが。



その後、無事に抽出も終わり、「次はちゃんと来るように」と釘を刺された晴人は帰路についていた。

四月といえど夜は肌寒く、吹く風が彼の体温を少しずつ奪ってゆく。時刻は10時を過ぎ、完全に夜の帳が下り住宅街は静寂に包まれている。街灯が冷たく道路を照らし、靴底がコンクリートを叩く音が反響する。

少し早足で歩こうとしたところで、見知った姿が視界に入る。どうやら彼女も晴人に

気付いたようだ。

「……数時間以来……だな、湊友希那」

「ええ……晴人」

これ以上会話はない。出会ったのは今日、2人ともコミュニケーション能力はお世辞にも高いとは言えない、殺気をぶつけた側とぶつけられた側。エンカウントした瞬間に逃げ出されないだけマシだろう。

逃げられなくてよかったと彼は思う。こうやって一対一で話せる機会は今後いつ来るか分からない。なら、今言わないといけないだろう。

「その……済まなかった」

初対面の人間に殺意を抱いてしまった事への、折角共通の趣味を見つけてくれた彼女の善意を無駄にしてしまった事への、彼女と自分が同類だと思ってしまった事への謝罪。

「私も……貴方の触れて欲しくない部分に踏み込んでしまっていたのよね……ごめんなさい」

彼の予想に反して彼女も頭を下げる。彼からしてみれば意味不明だろう。被害者が加害者に謝ってどうする？ 加害者がつけあがるだけだろう。

「貴女が謝る必要はない。俺が勝手に暴走しただけだ」

「それでもよ。私に悪い点が無かったわけではないの。晴人の心を知らない内に傷つけてごめんなさい」

友希那の言い分に晴人は目を丸くする。彼の心と、彼女の心。どちらが大事であるかなんて稚児でも分かるだろう。

「理解に苦しむ。明らかに俺が悪なのに、何故背負おうとするんだ？」

「人に優しくするのは普通でしよう？」

一切のタイムラグなく即答され、更に驚愕する。本心からそう思っているのだろう、底抜けに優しいのだろう、純粹な善意でそう言っているんだろう。

だからこそ。

「……貴女の優しさが、いつか貴女を苦しめないように祈るよ」

彼はこう祈るしかない。優しさや善意は自分を絞めあげる鎖にもなるのだ。自分の近くで、優しさ故に苦しむ人なんてもう見たくない。

無力な彼には彼女がとある人物と同じ轍を踏まないように願うしかないのだ。

新たな出会いを言祝ぐ四月の風が、2人の間をそつと通り抜けた。

クロユリ

君は、なぜ生きている？

—— 知らないさ。

君は、なぜ拒む？

—— 嫌だからに決まっている。

君は、なぜ死なない？

—— 死に意義を感じないからな。

君は、なぜ救わない？

—— 他人を救える程高尚な人間じゃないんだよ。

君は、なぜ笑わない？

—— 罪人の笑顔程忌まわしいものはないだろう？

君は、なぜ救われえない？

—— 救われなきやいけないのは被害者?????????の方だ。間違っても加害者俺なんかじゃない。

君は、狂うのかい？

—— 既に狂っているさ。いや、狂っているフリをしているだけなのかもしれない。

な。

その生き方をいつまで続けているつもりなんだ？

—— 永劫回帰の果てまで続けるさ。

彼女に話すつもりは？

—— 彼女が誰を指しているのか分からない。だが、誰に何を話したところで事態は決して好転しない。なら、話す必要も義務もない。

では君に最後の問いを。

君の嘯く被害者というのは一体この世界のどこにいるんだい？

—— それ、は……

ほら、答えられないだろう？ 君の罰は誰が望んだ？ 君の罪の根源は何処だ？ 唯

の自己満足だろう？ そんな行為では誰も救えない。

—— 黙れ。

君の行為は無意味だ。無価値だ。無駄だ。無益だ。非生産的だ。下らない。

—— 黙れ。

それに何故今更罰を望む？ 君の過失はあの一件のみだと？ 君はアレ以前には罪を犯していないと？ 冗談も程々にしてくれたまえ。

—— 黙れ。

君はあの一件だけが自己の運命を決定付けたと思ひ込んでいただけだよ。君はこの世界に生まれ落ちた瞬間から常人とは言えない程に歪んでいる。

—— 黙れ。

愛が理解できない欠陥品……その通りじゃないか。愛を示さず、愛を受け入れなかった人形。愛を知らず、愛を嗤った正真正銘のガラクタ。

—— 黙れ！

愛さえ理解できない人形が今更何を望む？ 失敗作如きが誰かに触れられると思つたのか？ 思い上がるなよ欠落者が。

—— 黙れ！ 知つた風に口を利くな！ これは俺の罪だ！ 俺だけが識つていなければならぬ罪だ！ 他の誰かに共感も同情も理解も示されてたまるか！

否、知つているさ。分かっているさ。理解しているさ。しかし同情の余地は一切無い。共感するつもりは欠片たりとも持ち合わせてはいない。罪を罪たらしめる原因はお前にあり、その報いは必然だ。

お前は美しくない、優しくない、強くない、醜くない、非道ではない、弱くない。お前は半端者だ。あらゆる意味で中途半端だ。出来損ないだ。

—— 俺を何処まで知つている……！ お前は……誰だ……！

僕はお前だよ、花崎????



「そういえば、なんでこんな時間に出歩いているんだ？ 日付は変わってないが、それも時間としては遅い。見たところ学習塾へ行っていた訳でもなさそうだが」

『本題が終わったのでじゃあ帰ります』などと切り出す事はせず、彼は無難な話題をチョイスする。対人コミュニケーション能力が平均よりも大幅に下回っている彼でも、この程度の事は出来る。この会話が続くか否かは彼の話題拡張能力に掛かっているのだが。「ライブハウスよ」

「あー……そういえばあったな……どんなアーティストが来てたんだ？」

彼は街を流離っていた時に、『Circle』というライブハウスを見つけたのを思い出す。

「私は観客じゃなくてステージに立つ側よ」

それを聞いて彼は少し目を丸くする。部活などにも入っていないであろう同年代の人が、ライブハウスでパフォーマンスを行なっているとは思わなかったのだ。

「へえ……意外だな。何ピースのバンドを組んでるんだ？」

「1人よ」

その返答に彼は少しだけ目を細める。その瞳に在る感情は憐憫か、同情か。どちらにせよ、プラスの感情は欠片たりとも籠っていないかった。

「ふーん……ずっと1人で活動を続けるつもりなのか？」

何故彼女に深入りするのかわ、その答えは誰も知らない。

「私の実力に見合う人が居るならバンドとして活動するのも吝かじゃないわ」

ここままで彼女が頑ななのは恐らく目指すべき目標や夢があり、その為に妥協や諦観はしたくないのだろう。

「……いつか見つかるといいな、メンバー」

だから、そんな在り来たりな言葉で締めくくる。それ以外に何て言葉を向けたらいいか分からないから。

「別に1人でもいいわ。私1人でもメンバーが居ても、やる事は変わらないもの」

その態度に彼は少し不満に思ったのか、彼女の美学に無粋と分かっているながら水を差

す。

「孤独つていうのは前を向いているときには感じない。」勝利「や」栄光「はそういう負の感情を消し去る効果がある。だが、些細な事に躓き立ち止まった人はふと思う。」自分の行為は正しいのか」

その正しさを証明する為、人は過去うしろを、足跡そくせきを振り返る。そして気付く。自分の周りには一切の人間がない事に。賞賛を、喝采を浴びた。勝利を、栄光を、名声を手に入れた。だが、それがなんだ？ その喜びを共有する他者がいないじゃないか。正しさを証明する友がいないじゃないか。

人は、自分の正しさを愚直に信じられるほど強くない。故に、その正しさの決定権を自分以外の誰かに委ねる。だが、その「誰か」すら居なかつたらどうすればいいんだ？ 自分の行為が、時間が、努力が、才能が正しいという事を信じたい、無駄ではないと言ってもらいたい。しかし、信じるに値する証拠も、言ってくれる他者も存在しない。

誰でもいい、抛り所を、宿り木を見つけてくれ。独り善がりの独奏曲ソリアなんて悲しいだろ？ 人には愛他者が必要なんだ」

ああ、なんて滑稽なんだろうか。愛を知らぬ欠陥品が、他者に愛を説くなんて。だがそれでいいと彼は思う。彼女にはこんな敗北者と同じ運命を辿って欲しくないのだ。動機なんてたったそれだけ。彼自身でも知らない深層心理が働いただけだ。

「……忠告をありがとう、晴人」

「礼なんていいさ。この行為はただの自己満足であり、独り善がりでしかない。たとえこれによって君の運命が良い方向に流転しても、君が俺に感謝を述べる必要はない。悪い方向へ転換したならば、俺を憎悪する義務があるがな」

「そう……晴人は一人なの？」

「……どうかな。もし仮に俺が孤独でないとしたら……誰かに祝福され、抱き締められる日々を送っていたのなら……それはなんて罪深い美しいんだろうな」

それは縛鎖、それは呪い、それは原罪、それは神罰、それは失落、それは忘却、それは焼却、それは消滅。

狂い哭く邪悪な獣は鳥籠の小鳥に、自らのたった一つの真実を告げる。

「だが、俺にはその感情を抱く機能がない。だって俺は……」

亡霊だからな」

呪わしい現在ユメを忘却の彼方へ、忌まわしき過去マボロンを轢殺の車輪へ押しやった彼は正しく生者ではない。未来を捨てた彼は死者でしかない。慟哭する冥府の使徒たる彼は凡ゆるものを諦観している。

人肉を貪り、底なしの我欲に溺れる傲岸不遜な畜生王は闇に吼える。
ああ、どうしようもなく全ての時間が忌まわしい。

不可能の象徴、開花

俺のパーソナリティが形成されたのはいつか、と聞かれると決まって「あの日」と答える。

だつてそうだろう？ 自分の未来を、価値観を、命の意味を、絆の虚しさを、血縁の弱さを知り、全てを失くしたんだ。

世界の残酷さを知つて、平等なんか何処にもないつて痛感して、誰にも祝福されない生命を知つた。

闇の悍ましさに怯え、光の狂気に震え、人の醜さに恐怖した。

これこそ誰にも祝福されぬ至星^{トリニティ}三界^{ヴェンデツタ}。

逆襲劇にも、英雄譚にもならなかつた。否、なれなかつた。その上、人の迷いすら放棄し、唯墮落と失墜にのみ生きることを選択した愚か者。

世界を呪う。未来を憎む。過去を拒絶する。現在を否定する。生命を嘲笑する。運命を愚弄する。

お門違いだつて事は嫌と言うほど分かっている。こんな事をして何も戻らない。

ああ、そんな事とつくの昔から知っている。

でも、俺は選んだ。この道の先に、地獄が待ち受けている事を知りながら。故にこの選択は今更どう足掻いても覆らない。

なら、往くしかないだろう？

約束された末路に墮ちる我が身に、後悔と諦観のみが存在するとしても。この行為に、なんの報酬がなくとも。

俺の死滅により、耳障りな鎮魂歌レクイエムを奏でさせてくれ。俺はその為だけに今まで生きてきた。あの日からずっと。

自殺を考えなかった日は1日たりともない。いつもいつも、自殺願望で終わる日々を送っていた。この場で死ねれば楽だと、何度だってそう思った。

だが、違う。そんな綺麗な死に方は赦されない。俺は可能な限り苦しみ、嘆き、悲哀に生き、痛みを受け入れ、絶望に浸り、傷を剥き出しにし、愛を知らぬ敗北者として生きなければならない。

それが無駄に命を浪費してきた俺への、当然の報いだ。



「メンバー候補が一人見つかったわ」

一日の授業が終わり、生徒は部活に精を出すか帰宅するかかの二択の時間に友希那は晴人の元にやってきてそう告げた。

「……なんで俺に言うのかは知らないが、よかったな」

パラパラとめくっていた参考書を閉じ、友希那の方を向きながら彼はそう言う。声音には何処と無く安堵が籠っており、先ほど言った内容が嘘ではないことが分かる。

「パートはギター。素晴らしい腕前だったわ。不断の努力と才能によつて裏打ちされたほぼ完璧な演奏、テクニックも申し分なかった。ネックなのは表現力だけど、それくらいは幾らでも改善できる。私が要求しているスペックの水準をほぼ全分野で上回っているわ」

少し語気を強めて言う彼女の姿は、とても純粹に夢を追っているバンドマンのようであった。恐らく、自分の理想形とも呼べるような人間がいて嬉しいのだろう。そんな彼女の姿を見て、彼も少しだけ頬を緩める。

「そうか……上手くスカウト出来るといいな」

そう優しく微笑む彼を見て、友希那は驚いたような表情をした後に笑顔を浮かべる。その笑顔に込められた感情は、安堵。

「……晴人、初めて私の前で笑ったわね。いつも仏頂面か何かに苦しんでるような表情

しか見せてくれなかったけど、そんな顔もできるのね。安心したわ」

何を隠そう、晴人と友希那が出会って約2週間ほど経ったが、彼は一度たりとも笑顔を見せなかったのだ。そう、唯の一度も。彼の凍った仮面は笑みを浮かべる事を許さず、苦悶に喘ぐ事のみを許可した。

その契約を守るべく彼は鋼のごとき自制心で苦悶以外の感情を堰き止めた。だが、その決意が無意識的に緩んでいたようである。笑顔が零してしまった。人間の分際で完璧を謳う彼は、無意味と分かっているながら自責の念を抱く。

「……やめろ、見るな。俺に笑顔は相応しくない」

簡潔に、端的に伝えるのは拒絶の意。頼むから自分の醜い笑みを見るな、自分よりも笑顔に相応しい人間はこの世界には幾らでもいる、故にやめろ、と。

そんな懇願するような拒絶に対して、友希那はどこ吹く風だ。彼の話を欠片たりとも聞いていない、又は聞き流している。

「いつもの表情よりは随分マシよ。それに晴人の笑顔は貴重なもの、もつと見せてほしいわ」

貴重、というよりはバグや不具合と言った方が正しいかもしれない。正常に働き、その役目と機能を十二分に果たしていた仮面が内的要因により、突然致命的な笑顔を生み出してしまったのだから。

「やめてくれ……」

力無く言う彼には疲労や諦観の念が強く現れている。対して友希那は面白い玩具を見つけた子供のように琥珀色の瞳を輝かせている。何処までも対照的な二人を、赫く焼けた空か照らしていた。



友希那の晴人弄りが一旦区切りが付いた後に、彼女は本題を問いかける。友希那は晴人にメンバーが見つかった事を告げに来た訳ではないのだ。偶然晴人が教室に居たから伝えただけで、本来の目的はそれではない。彼女はこのクラスに所属している人を探しているのだ。

「そういえば、リサを知らない？」

その問いに対する回答を友希那は特に期待していた訳ではない。ただ、近くにいたのが彼だったから聞いた。それだけだ。だが、彼女の予想に反し、彼は望んだ答えを持っていた。

「今井リサならお前が来る前に、『外の風に当たってくる』と言って出て行ったが……火急な要件か直接会って話さなければならぬ事以外なら俺が伝えるが？」

それはつまり、晴人とリサが先ほどまで共にいたという事を示している。その理由は気になるが、先に彼の疑問に答えておくべきだろう。

「ただ、一緒に帰ろうと思っただけよ」

たったそれだけ。ありふれた日常の繰り返しと延長線

いつでも手練り寄せられるように。いつまでも忘れないように。優しい刹那が永久へ変わるように。当たり前の日々が何よりも大切ゆえ。

それはいつぞやの彼が大切にしていたもの。"いつも"が"特別"に潰されない為に守り続けてきた信念。彼が信じ縋ってきたモノは最適な人に、最適な形で叶えられる。それを、諦めた者如きが邪魔することなんて出来ない。

「そうか……ならば教師の真似事もこれで終いにするか。続きはまた後日でもいいだろう。お前を待たせる訳にはいかない」

非日常は終わりだ。この続きは日常でいいだろう。時間は有限だ。彼の時間と彼女の時間、どちらが重要かなんて簡単に分かる。

「教師の真似事？」

「ああ。教えを請われたからな。断る理由もなかったので受諾した。それだけだ」

同じクラス、近い席、最初に話しかけてきた人間。彼に誰とも繋がらない生活を選ばせなかった存在。晴人が苦手意識を抱いている人間の1人。

他には、たった数回の会話で彼の心を見抜いた天才水川 日葉、彼の取り繕った仮面に気づいた演者瀬田 薫が挙げられる。

それはそれとして
閑話休題

「まだ終わってないのかしら？」

「まあな。だが、この程度時間を見つければ幾らでもできる。お前の願いを優先しても問題ない。最も、今井リサが続きを望んだならその限りではないが」

とは言つたものの、今井リサの性格や行動を加味すれば後者を選ぶ事は容易に分かる。こんな物は確認事項にすらなり得ない確定された事象だ。

「そう……なら、お言葉に甘えさせてもらいましうか」

「ああ。存分に甘えてくれ」

誰かの善意に甘える事は必要だ、と彼は謳う。

だが、本当にそれは本心か？

お前にあるのは外付けの偽善と凝つた醜さだけだろう。そんな人間が善意や甘えを騙るなんて、ああ、なんと浅ましい。

でも、それでもと彼は逆説を紡ぐ。

「そういえばリサに何を教えていたの？」

興味か、好奇心か。彼女は彼にそう問いかける。如何なる意図でこの問いを投げかけ

たのか、彼は理解できなかった。しかし隠す意味も理由もない故、彼は快く答える、「ベクトルだ。今までの数学とは少し考え方が異なるからな。恐らく戸惑ったんだろう」

「……そう」

その返答までの時間、およそ5.69秒。纏う空気、浮かべる表情。その全てで彼は彼女の言わんとする事を察した。

ここまで来て放り投げるのは流石に忍びないので引き受けるが、以降は軽率に返答するのはやめておいた方がいいだろう。

「……次回の日程は必要か？」

選択肢は2つ。だがこれまでの問答を加味すると、考えうる回答は1つのみ。

「お願いするわ……」

力無く俯く彼女をなんとも放っておけなくて。柄にもなくこんな事をしてしまう。

「了解した。追って伝える」

◆ 問いの意味は、問いかけた後にも発生する事を身を以て体験した晴人だった。

Omnia ferretas, animum quoque.

時 全 て 運 び 去 る。 思 い 出 も、 ま た。

それは否だ。時は何も運び去ってはくれなかつた。

あの日の思い出も、あの日の傷跡も。

何もかも在りし日のまま鎖となり、決して離してくれない。

満ちては欠ける銀の月は、三相煌めき醜い我が身を妖しく照らす。

夜天に散りばめられた数多の星々へと呪いの顎門を軋らせる。

我が身の全てよ死に絶えろと、虚しく闇に吼える。

決して届かぬ夢へ手を伸ばした蠟翼は、その伝承通りに翼を焼かれ地に墮ちた。

過去と未来と現在はあるの日の後悔を決して逃がさない。

地獄を照らせ北極星よ、無意味な独奏曲を響かせろ。

俺の罪は、今此処に。

残滓

夢を見た。過去夢を見た。現実夢を見た。

家の中にいる。誰の家だろうか？

でも、とても懐かしい香りがする。

壁はアスベスト、水道水は硝酸、蛍光灯はγ線。

溢れたものは死。吐き出すものは死。嘆くのは僕。笑うのは家族。嗤うのは運命。

何もかも歪だけれども、それでも確かに在った僕の居場所。

息苦しかったし、痛かった。世間一般から見れば幸せとは縁遠い状態だったんだろう

けど、僕は自分の環境に幸福を感じていた。

見てくれていた。僕を見てくれていた。手段は最悪だったが、この結果の前では芥以

下の価値しかない。

愛されなくてもよかった、といえは嘘になる。確かに僕は愛されたかった。他でもな

いあなた達に。

でも。

それは無理だろう。僕の完全上位互換である彼がいる限り、彼らの愛が僕に降り注ぐ

事はない。それに僕は愛がわからない。愛は限りあるものだから、その価値がわからない人間に捧ぐより、分かる人間に与えた方がいいだろう。

泣きそうだ。

その涙を隠す。

吐きそうだ。

笑顔の仮面を貼り付ける。

死にたい。

無理やり呼吸を再開する。

生きる気力もない。

無感動に過ごす。

愛されたい。

愛の無意味さを知れ。

消えたい。

存在し続けろ。

天から堕ちろ。

罪業つみに溺れる。

それが、僕の存在証明。

流していたシャワーの栓を止め、男性にしては少し長い髪を掻き上げる。ノズルから水滴が万有引力の法則に従い滴り落ち、それが水面を叩く音が静謐なバスルームに反響する。

鏡が彼の像を結ぶ。そこにあるのは忌々しいが捨て去ることも出来ない醜い体。あの日発生した事象が、決して白昼夢でない事の動かぬ証拠。

首から下において、左四肢を除いて傷がない箇所が無い。

火傷痕、切り傷、打撲痕、縫合痕、刺し傷……肌が青く変色している箇所すらあり、限られた短期間で負ったものではない事が簡単に見て取れる。それらは一生消えない傷跡として、未来永劫彼の肉体を縛り付ける。否、肉体だけではない。その肉体に内在している精神すら縛り付ける鎖となる。

逃げられないし逃がさない。お前は永久に罪の奴隷だと言わんばかりに傷が存在し続ける。それはまるで、人間が神の元を離れるときに背負った原罪のよう。違う点を挙げるとすれば、原罪を贖う救世主が居ない事だろうか。

しかしそれは当然である。この罪は彼だけのもの。他の誰かが背負うことは不可能

であり、彼がそれを望まない。故に一生傷は消えないまま、彼の命が終わるまで在り続ける。

その反面、左四肢……もつと言えば、左肩から下の腕部と左足から下の脚部には一切の傷跡がない。それだけならまだ許容範囲だ。ただの肌が綺麗な人というだけで済む。だが、あらゆる部分に傷を負っているのに、その箇所だけ綺麗なままというのは明らかに歪だ。

それに、綺麗すぎるのだ。その綺麗さは人間味を感じさせない。カテゴライズするならば人形に属する類の美しさだ。

そんな自分の体を一瞥し、舌打ちを一つ。絶対零度の無機質さと、凝った憎悪が同時に存在している瞳でじつと見つめる。

そして唇の端を吊り上げる。彼の冷笑が鏡の世界に映し出される。少しばかりの寂しさを孕んだソレは、見る者全てを恐怖に陥れる冷たさだった。

「生命としての欠陥、か……」

ポツリと彼は呟く。その声音からは一切の温度が排除され、黄泉から吹く風の唸り声のように聞こえる。

そうだ。彼は欠陥品だ。半年前の出来事により、子孫を残すという生命としての最低限の義務すら果たせない身体となってしまった。恐らく異性と粘膜接触しようとも一

切の反応を示さないであろう。

「全く、使い物にならないな」

その言葉は誰に、何に向かつて言ったのだろうか。

「If ^今 it ^こ were ^で now ^死 now ^ね to ^た die ^な,

, ^こ There ^の now ^上 to ^な be ^い most ^幸 happy ^せ」

呟くオセローの一文。かの文豪、シェイクスピアの著者に記された一文。無意識的に紡がれた言霊は寂々たるバスルームに意味をなさない残響としてあり続ける。その振動を鼓膜が捉え、音として脳に伝えるが、彼は気に留めていない。

考えるのは????のこと、????のこと。

そして……

「……なんでお前が出てくるんだろ。まだお前とは会って数週間程度なのに。たった数回会話しただけなのに」

音楽に対してストイックな、銀髪の少女が脳裏にちらつく。

「それだけ俺の中でお前の存在は大きくなったのか？ その眩さに救われたのか？

誰かの夢を背負う彼女の姿に片手の俺を重ねたのか？ 俺にその資格がないと分

かった上でそんな幻想を抱くのか？」

淡々と、冷静に。自己の感情を解析する。声音からは温度が失せている。物理的な冷

たさすら感じる程だ。

しかしその言葉には明確な苛立ち。人を殺せてしまえそうな憎悪。感情一つに対しての異常な憤怒。凡ゆるモノを諦観した絶望。その声には確かに熱があった。

「巫山戯るなよ。誰がそんな幸福を赦した。誰が赦しても俺が許さない。誰が望んでもこれだけは譲らない。この末路は絶望だ。だが、それでも。否、だからこそ。俺はそれを受け入れなければならない。傷を受容し、その生涯を終えたときこそ俺の罪が永遠となる。拒絶は悪だ。拒否は芥だ。罪を断つな。諦めを唾棄しろ。救済を捨てろ。絶望を手繰り寄せろ。罪を。罪を。罪を。痛みを。痛みを。痛みを。痛みを。」

あの日に契った約束を狂ったようにリフレインする。瞳の焦点は定まっておらず、有機と無機の境界線を彷徨っている。

頭痛が酷い。まるで内側から自分の世界を崩されているような鈍い痛み。まるで麻酔なしで脳を弄られている鋭い痛み。手酷い拷問を受けていた過去の大罪人や異教徒すら味わった事が無いであろう激痛が彼の脳を蹂躪する。

手を伸ばす。その先には鎮痛剤が入ったボトルがある。だが、あと数cmの時点で伸ばした手をゆっくり下ろす。

「……ああ、そうか。薬なんか頼ってるからこんな弱い考えが浮かぶのか。先生からは叱られそうだが、いい機会だ。俺の手で俺自身を調教してしまおう。二度と弱い考え

が浮かばないように。永遠に仮面を被り続けられるように。俺の本質を誰にも悟らせない為に。顔に表れるのは三流の証左だ。俺は、完全以外では意味がない」
虚ろな声で呟く彼の背には、重い十字架があるように見えた。



「それで、俺をどこに連れて行く気だ？」

少しばかりの苛立ちを交えて前の人物……帰路に着こうとした晴人を拉致した少女に問いかける。

「昨日言ったギタリストに会わせるのよ」

「理由がないな」

ノータイムの返答。何故友希那が組むバンドに入る予定のメンバーに、無関係な人間である彼が会わなければならないのか、理解不能なのだ。

「拒否権はないわ」

こちらと同じくノータイムの返答。そのまま彼女は後ろを向き、彼を見つめる。琥珀色の瞳と無機質な蒼穹の瞳が交差する。

心底くだらない事で争っている2人を通行人は奇怪なものを見る目で、或いは微笑ま

しいものを見る目で一瞥している。

お互い一步も引かない状況。このままではただ悪戯に時間だけが過ぎると判断した彼は、自分が持つていた答えを捨てた。

「分かった。行くよ」

「晴人ならそう言うと思つてたわ」

内心を見透かされた様で少し目を細める。そしてため息を一つ吐く。その音は喧騒に掻き消されたが、目の前にいた彼女には届いた。

「ため息を吐くと幸せが逃げるわよ」

「そんなものは迷信だろう。容易く日常に組み込めるルーティン如きで、形もなく概念すら定まつてない」幸福」という人類が追い求める一つの命題が消えるわけがない」

「晴人は幸せを求めてるのかしら?」

「寧ろ最も忌むべきものだ。罪に濡れた俺には、眩しすぎるさ」

幸せを望まない人間は、人間ではない。それはつまり、彼が人間でない事を示す。精神的には勿論のことだが、肉体的な面でも彼は少々人間から逸脱している。

「駄目よ。どんな形でもいいから、晴人は晴人なりの幸せを見つけないと」

そんな彼を知らず、彼女は正論を叩きつける。

いつもの彼なら「正論だから救えるほど、世界は優しくない」とでも言うだろう。或

いは彼女ではなく他の誰かが言ったならば、同じ事を言っていたらう。

でも、彼女の優しさを無駄にしたくないから。

「ああ、そうだな。いつか、見つけないと……」

「精一杯の強がりと言う。友希那が言った幸せから、目を背けながら。心にもない事を、嘘を言う度に強まる頭痛を噛み殺しながら。」

追憶

深い水底からゆつくりと浮き上がる感覚を覚える。しかし海に溶けた思念は優しく自分に絡みつき、再び夢に墮とそうとする。

その反面、理性は自分を厳しく縛り上げ、現実には引きずり出そうとする。

夢に微睡み、幻想に揺蕩う。それこそが人の本性であり本能であると、脳髓がシグナルを発する。

そのシグナルに従い、更に深層へ進行する。

理性の縛鎖は解けた。夢の海に溶けた思念が、思考能力を後押しする。

—— きみはだれ？

漂白された脳髓が問いかける。

『さあね。名付けられた名前ならあるけど、本当の名前なんか忘れたさ』

—— どこにいるの？

『鳥籠、牢獄、監獄……まあ、言い表すならこんな所かな』

—— なにがほしいの？

『終わり。それ以外はいらぬ』

—— 否。

『存分に朽ち果てられる終わりを望む』

—— 否、否、否。否否否否否否否否否否否否否否否

—— それは、否だ。

—— お前が欲しいのは本当の家族だよ。

—— だってそうだろう？

—— ほら、そこにも。

—— 聞くに耐えない雑音に従い、振り向くと。

—— 全てを手に入れた僕が。

—— 俺を見下していた。

呼吸が加速する。心臓が不気味なほど脈打つ。体が熱い。視界がブレる。耳鳴りが酷い。

これは夢だ。

視界を遮断しろ。

あの瞳の温度を忘れろ。

だから、俺はなにも知らない。

呼吸を整え、彼は自分を惑わす漂白された脳髓へ殺意を向ける。憎悪で血液が沸騰し
そうだが、思考は酷く冷たく冴えている。

自分が何をすべきか。

脳髓の前に足を運んだ彼は、左手をそれに被せる。そして、ゆっくりと力を加えた。
滴り落ちる毒々しいピンクの脳漿。それが思念の海に溶けてマーブル模様を描く。

細胞同士の結合が千切れる音。その音階は祝福を奏でるようである。

脊髄が碎ける音。骨片が水底に沈殿し、動くたびに舞う。

大凡人間では有り得ない力を脳髓に加える。その度に汚物と雑音をばら撒きながら、
ゆっくりと死に向かう。

—— ああ、やっぱり君はそうやって。

一際大きな力を加える。

—— 最初で最後の幸福さえも、捨てたんだ。

漂白された脳髓が、砕け散った。



友希那よりも背が高い彼は、彼女に歩幅を合わせて歩く。2人の間の空気は決して悪いものではなく、交わされている会話も平和なもの。側から見れば初々しいカップルだが、実際は違う。

彼が行なっているのは計算し尽くされた会話。相槌や呼吸のタイミングは完璧。そこに一切の人間性は見られない。それは本来、相手の持つ情報や真意を引き出すために交渉人^{ネゴシエーター}や政治家、企業人によって行われるはずのもの。

嘘が上手くなった彼は、誰も信じなくなった彼は、日常の中に組み込まれる在り来りな会話ですら普通に行えなくなってしまうた。

それに気づかない彼女は話し続ける。不気味なほど弾む会話が周りの風景を置き去りにする。心の中に芽生えた安心感が彼に対する警戒レベルを数ランク下げる。

それが最悪の一手だったと気づく日は、来ない。



「初めまして、氷川紗夜です」

「……こちらこそ初めまして、花崎晴人です」

会話終了。紗夜が最初の一文字を発してから僅か6秒で、初めての会話は幕を下ろした。

紗夜もまさかこんなにもあっさり会話が終わるとは思っていなかったようで、少し驚いているようだ。

その原因はやはり彼にある。紗夜の情報を聞いた瞬間、彼女に対する警戒レベルが最高クラスに跳ね上がり、自己の情報を渡すべきではないと判断したのだ。

氷川日菜。羽丘学園の生徒であり、彼のクラスメイト。特筆すべきはその天才性。凡ゆる分野において遺憾無く発揮されるその才能は、誰かを見抜く点でも残酷なほど示された。元々とある人物を思い出される事から接触を避けていたが、ちよつとした……クラスのレクリエーションの際に数回会話しただけで、彼の本質の一端を察したのだ。

それ以来、彼は無意識的にも意識的にも接触を避けている。本来なら同じ空間にすら居たくないほど、彼女に苦手意識を抱いている。

己を暴いた天才と同じ苗字の人間。警戒しないほうがおかしい。もしかしたら同じ苗字の他人という可能性もあるが、別段有り触れているわけでもない「氷川」の姓がこんな小範囲に複数存在するとは思えない。故に何かしらの血縁関係があるのは確実だ。

姉か、妹か。何れにしても氷川紗夜という人物は氷川日菜に匹敵する才を持つことがあり得る。

「是か非か……見極めるまで、お前とは話さない」

温度が失せた黄泉の視線は、氷川紗夜の心臓を凍えさせた。



「晴人……もう少し会話したらどうかしら？　彼女は信頼できる人物よ」

結局、あれ以来会話がなかった。最初から最後まで、彼と紗夜の間には息が詰まりそうなほど重苦しい空気が流れていた。

かと言って双方とも視界から排除しているわけでもなく、紗夜は彼の方をチラチラ見ており、彼の方も時折見定めるかのような視線で彼女を見ていた。

懐かない、近づかない、それでいて視線は外さない。以上の3点セットを取り揃えた2人の頑固者。

『貴方達は警戒心の強い子猫か何かなの？』と思ったのはきつと友希那だけではないだろう。

それはともかく
閑話休題

そんな子猫暗人に問いかけたのは本日の反省。もつといい方法があったのではないか、もつと寄り添えたのではないか、あんな突き放すような言動をする必要なんてなかったのではないか……聞きたいのはこんなところだろう。

そんな友希那に彼は極めて冷酷な、透徹した瞳を向ける。そこに温度は込められていない。

「生憎、数回の会話で他人を信用できるような幸せな人生は送っていないんだ。それに、彼女がどんな人物なのか知らないし知るつもりもない。俺と彼女は赤の他人。それ以上

を求めるつもりはない」

それに、と一旦彼は言葉を区切る。

「恐らく氷川日菜と氷川紗夜は血縁関係者だろう。それだけで俺にはアイツを最大限警戒しなければならぬ理由がある」

自分を暴いた、普通の人間にとつてみれば有り触れているあの日の会話を、彼はきつと生涯忘れない。敗北ばかりの彼の人生でも、指折りの敗北故。

その敗北の味を思い出して、彼は僅かに顔を歪める。仄かに薫る殺意。風に乗って舞う憤怒。それらを一瞥して、彼は「無価値だ」と、吐き捨てる。

「……私も赤の他人なの？」

その問いに対して、彼は嗤う。何故当たり前のことを問うてるのか、と相手の無知を嘲笑する。その白痴を嘲る。

「俺がお前に問われた事以外、何かを話したか？　それが答えだよ」

お前は信頼できない、お前に機密は漏らさない、と宣う彼に友希那は表情を陰らせる。出会いは最悪ながらも、良き関係が続けてきた友人だと思ってる彼に真つ向から否定された。

「面と向かって言われると悲しいわね」

口ではなんとも思っていないように振舞っているが、実際は如何なのだろうか。スト

イツクながらも、17歳相応の心を持っている彼女は傷ついていないのだろうか。

「俺が信頼している人間なんて1人しかない。その1人も、もういない。いないんだ。何処にも」

自分に言い聞かせるように、自分以外の誰かに諭すようにか細く言霊を紡ぐ彼の様子は酷く脆そうで。

「……晴人……？」

突然変わった彼の様子を心配して掛けた友希那の声が聞こえるか聞こえないか。そんなタイミングで彼は大きく一歩前に踏み出し、ターン。パーカーの裾が遠心力によって翻る。

「ああ、お前にとっておきの言葉をプレゼントしよう。これからの人生で役立つかもしれないからな」

けたたましく鳴っていたクラクションが聞こえない。風の音も、人の声も。

2人だけの世界に連れ込まれたようで。

世界の秒針が、友希那と晴人を置き去りにする。

有機無機問わず、全てが死止まったんだ灰色の世界の中で。

彼は。

とっておきの皮肉を思いついたかのように整った顔を痛々しく歪めて。

「信じる者は、
巢食^すわ^くれる」

反芻

「信じる者は、すく巢食われられる」

裂けた三日月を口元に浮かべ、捕食者の瞳で灰色の世界を見下ろした。この半径数mだけが俺の世界。俺を殺して俺が殺した、矮小な箱庭。色彩を失い、透明すになった場所。ああ……なんて醜い。思わず祝嘲福りを乗せた音を空っぽになった掌で奏でてしまっただ。

こんな歪んだ行動でしか、完膚なきまでに潰された『自己』と言う空虚なテクスチャを再定義出来ないなんて、本当にどうしようもない。そうやって誰かを傷つけて現れた無価値な『自分』すらも刹那のうちに灰となり、風に溶けて『世界』に爪痕を残すこともなく居なくなってしまう。残るのは再び『虚カウ』になった花崎晴人と言う識別コードと人生を与えられたニンゲンの成れの果てと、心を踏みにじられた他者だれか。其処にはなにもなく、がらんどろ。どこか知らない、遠くで『花崎晴人』が嗤っている。その雑音は、聞くに堪えない。

前にいる哀れな小娘を見やる。案の定、顔は恐怖に歪んでいる。ああ、そういう表情カオは大好きだ。

“ 深淵をのぞく時、深淵もまたこちらをのぞいているのだ ”

実存主義の先駆者であるドイツ哲学者、フリードリヒ・ニーチェの言葉だ。

深淵に、のぞかれた。深淵に、追いつかれた。深淵に、触れられた。

深淵おれに、
——。

今の彼女は、きつと未知しんえんを恐れる心を、震えや表情の変化を以て外界に出力しているのだろう。

夜の残滓が薫る。主張する事もなくするりと鼻腔を通る、無臭の香り。無い、されど有る。その矛盾を成立させるナニカ。遺伝子に刻まれた人間の本能が実態無き何某を捉えた。抱いた感情は安堵。口角が少し下がる。三日月が沈んだ。その反面彼女の顔は更に硬くなった。

燃え尽き、朽ち果てた俺の魂……その、断片。それが再燃する音。断じて業火ではない。例えるなら火種や燈といった方が適切だ。壊れた玩具と成り果てた人間を動かすには全くもつて足りない。それに、そもそも内部システムがイカれているのに、正常に稼働する訳がない。故に、これはバグとバグが重なり合って、表面上普通に見えているだけ……つまり、空っぽ。

その悲しさや寂しさを例えるなら、真夜中の公園、誰もいないバス停、種火の消えた暖炉、弦の張っていないアコースティックギター、忘れ去られた遊園地。錆びついた観

覽車に一人ぼっちの俺が乗っている。

煤け、汚れた病棟で白衣を纏った女医がその眼光を鋭くした。小さな箱に入った4人の人間だったナニカは嘲笑の声を上げた。本当にそうかはわからない。ただ、俺の直感がそれを示した。もしかしたら、こうしてまた無垢で罪のない少女を傷つけた俺を彼らに罰してほしいのかもしれない。

女医には、1人の人間として。先生は人間性が饒舌に尽くしがたいほど歪んでいるが、与えられた役割と医者としての使命には忠実だった。そして、一人ぼっちだった俺にできた、もう1人の■。だから、俺に罰を。

小さな箱に入った4人には、俺が初めての■と、最初で最後の■として。俺が奪ってしまった彼らの未来。■■■■、■■■■、■■■■。その4人の名は今でも俺を戒める鎖となつている。もう名前すら呼べなくなつた彼らは、今何を思っているのだろうか。

左四肢と右眼球、体の内部がナイフで滅多刺しにされたような灼熱の痛みと、死神の腕に掴まれたかのような冷たい痛みが俺を蝕む。魂の深淵に刻み込まれた呪痕のようなソレは絶え間なく疼き、物質界に未だ在り続けている俺の肉体を異なる界に引き摺り下ろそうと躍起している。だが、まだ死ねない。死ねないのだ。俺の償いはまだ終わっていないのだから。

刹那の激痛を飲み干し、もう一度彼女を見やる。影を落としたような表情、少し力の入った手、長い髪は風に揺れ常に変化している。きゅつと結ばれた唇は言葉の激流を食い止める防波堤やダム役割を果たしているのだろう。きつと彼女も分かっている筈だ。もう『花崎晴人』は終わっていることを。すでに対話という可能性を選べないほどに壊れていることを。

少し前に読んだ本を思い出す。タイトルも作者も忘れた本だが、内容は覚えている。ポストアポカリプスものだった。

核戦争によって『国家』という機構が崩壊し、人間を含む生命種の大半が滅びた……その後の話。放射線に晒された死の大地、灰の降る空をキャンパスに、黒く淀んだ人間の心を描く物語。バッドエンドでもなければハッピーエンドでもない。文を紐解くときから分かっていた、予定調和の如く結末。

世界が終わったときに生まれた青年の苦悩と絶望がひたすらに一人称視点で綴られている本だった。登場していたキャラクターは壊れていたり、悩んでいたたり、疲れていたり、泣いていたり……人間としての負の側面を剥き出しにしていた。

登場人物が言っていた、「神が見放した世界の何を信じれば良いのでしょうか？」という言葉は俺の中で生きている。別に俺たちが息を吸って吐いてる世界は滅んだりはしていないが、神が捨てたというのだけは同意する。

だつて。

この世界には。

あまりにも悲しいことが多すぎる。

目の前にもいるじゃないか。夢に一人ぼっちで歩む少女が。この世に神がいるのなら、こんな善人を放っておく筈がない。

だから信じないし信じさせない。信じる事は無意味だと世界に嘲りの声音を轟かせる。信じて奪われるなんて安っぽい悲劇はもう繰り返したくないのだ。

なあ。お前もそう思うだろう？

「……それを言えるって事は、貴方も誰かを信じていたのよね。でも、裏切られた。裏切った。だから晴人は信じない。その痛みを誰よりも知っているから。信じるよりも疑った方がずっと楽なもの。当然よね」

……コイツは。

まだ俺と対話することを望んでいるのか？

「でも、それは卑怯よ。常に誰かの善意の裏側に探りをいれるなんて事は……最低よ」
耳が痛くなるほどの理想論。綺麗事。

「卑怯も何も、それは確立された処世術の1つだ。嘘やブラフが必要悪とされるように、それもまた必要悪だ。善意の裏側で他者の破滅を考えている獣が多数集まってコミュ

ニティを形成しているのが人間だ。そんな中で与えられる善意に無警戒でいられるほど能天気じゃない。ヒトはロクでもない存在だって、既に結論は出ている。幾星霜重ねようが、それは決して覆らない」

「善意を疑って、優しさを蹴落として……その先に何かあるの？」

空か。宙か。この煙の先はきつと誰も知らない。だというのに、俺には届いた。

否。違う、違うのだ。届きすらしてない。垣間見た、という表現が正しい。

それを見るには、存在が矮小過ぎた。強度も然り。

運命は悪辣だな、と心の底で呟きながらいずれ俺が至る王冠の景色を受け止める準備を進める。

理外の情報が流れ込む脳内で、俺は唯一明確に認識出来る『画像』、『写真』、『記憶』、『未来』、『イメージ』を見た。視て、観た——

「野花すら咲かない地獄さ」

俺の肉体に暴虐の限りを尽くす彼らの姿を、これは聖戦だとも言わんばかりに俺を壊す彼らの姿を。

「そこで俺は墓守りをする為だけにここに居る」

花の一つすら備えられていない殺風景な墓。そこに赫を加えて鮮やかに。

「ああ、些か抽象的過ぎたな。じゃあ、こう言い換えよう」

生命としての温度を突き抜けて。

狂気と踊って。

理性に嗤って。

悪性を愛でて。

矛盾を賞賛して。

たった1人、『僕』に手を差し伸べてくれた誰かの顔から目を背けて。

振り向いた過去に啼いて。

たった1人、『俺』と対話してくれた誰かの声を聞こえなかった事にして。

前に広がる未来から逃げて。

そうして。

「今はただ、いつか死ぬ為に生きてるだけだ」

夕立が降りそうな空だった。

憧憬

其処は暗かった。其所は痛かった。底は穢れていた。

とても静かで、寂しい場所。命あるものは一人としていない。然り、ここは死者の国。その命を解いた者が眠る場所。たとえ半身を吹き飛ばされようが生命活動を維持できるほど医療技術が進歩した現代でも、『死』は『死』なのだ。決して覆すことのできぬこの結末は、きつと未来永劫人類を扉の向こうから見返しているだろう。そのドアの先は、生者には知り得ない未知の世界が広がっている。

だから、『死』には何物にも代え難い価値がある。生命は生まれ出るときより死へ疾走する。ならば、『死』という無二にして普遍的な結末を与えられた過去の彼らには敬意を払わねばならない。いつか、誰も彼もそこへ向かうのだから。故に、人類には死者を弔うという習慣ができた。いつしか訪れる復活のため、安らかに眠らせるため……或いは、忘れないため。理由は様々だが、埋葬という同じ結果に辿り着く。

風が凧いだ。酷く冷たい、黄泉から吹き込む亡者の吐息。生きたかった明日に向かつて亡者は怨嗟かぜを吹かせる。

死神が手を叩く音階でワルツを踊る。お相手は顔の潰れた誰か。それは死者という

名詞に与えられたイメージ。生者が死者に押し付けられた像。撒き散らされた呪の鱗粉はこの場を異界へと変質させる。界はズラされた。不快さを覚えるほど粘度が高い『死』は、世界の物質に絡みつき、溶けて、命の絶対値を削り取っている。

命を廻す風車の音が聞こえる。震える音。きつと壊れている。輪廻転成論なんて聞き飽きた。復活の奇跡は唾棄すべき三文芝居に成り果てる。天国はなかった。救いもしかり。ここにあるのは不確かな今日。目を逸らせない昨日。逃げられない明日。時間というレンガを積み重ねた末にあるものが”存在”であるならば、崩れるのは刹那のうちであり、だれも気に留めない。

「ああ……」

そう、命あるものは一つとしていないのだ。ならば白痴と悪性矛盾の狭間で微睡む彼も生者ではない。悪霊、生霊……或いは、亡霊。カテゴライズするならば、これらのどれかに属するだろう。

「この花ですらいつかは土に還る……」

手には2つの花束。鮮やかさを持つそれすら、『死』に削られている。

「いつか、この生に答えを出せるものが現れたら」

数多の墓石を通り過ぎる。

「僕も」

時計の針は丁度丑三つ刻を指した。

「貴方達も」

鼓膜を震わせる波はなくなった。風の粘度も感じない。だが、火傷するほどの冷たさはあった。

死者の人生は、誰のもの。

「終われるのかな」

『花崎家之墓』、『??家之墓』



「白金、燐子……」

思い出すように、噛みしめるように彼はその名を呟いた。

「知っているの?」

隣にいる友希那が少し驚いた様子で彼に問いかける。当然だ。未だクラスメイトの名前を片手で数えられる範囲でしか覚えていない彼が、他校の生徒の名をリフレインかんじょう……それも色をつけて……するのは、明らかに異常なのだ。故に、彼と白金燐子の間に

何らかの接点がある事は確實だ。それも、様々な意図や意思、状況が複雑に絡み合った関係。

けれど。

「……知らないな」

彼はそう答えた。隠しきれない動揺、脈拍数の上昇。暴露とあらかじめ分かっている嘘。冷静な彼らしくない無意味な行為。問い詰めれば問い詰めるほどボロが出るのは明白だ。

もしかしたら、これに乗じて誰も知らない彼の本心が分かるかもしれない。

「……そう」

だからこそ、彼女はこれ以上踏み込まなかった。

その裏側に込められた意図を彼は感じ取ったのか、申し訳なさそうな顔を浮かべて。

「済まない……」

そう一言だけ呟き、彼は教室を後にした。



「白金、燐子……」

当然のことながら晴人は知っている。

「あの日の関係者……いや、違うな。彼女は関係者じゃない。アレを連想させる人物にこんな所で出会うなんて」

それも、プラスではなくマイナスの存在として。

「なあ、君はどう思う？」

晴人を詳しく知らない、されど彼の身に何が起きたのかを恐らく知っているであろう人物に向けて問う。

「ずっと、背を向けている臆病者の事を」

逃げていた。ずっと逃げていた。そして、これからも逃げ続けるだろう。弱いから。直視したら壊れてしまうから。だから斜めから事象を見下ろしている。尖った出来事が丸くなるように。

「このまま終われないってことぐらい、分かっているのに……さ」

いつか向き合わなければならぬ、しかしそれは今でなくてもいい……ありふれた逃避の言葉。それを以て先延ばしに。

「逃げた先で逃げたナニカに出会うなんて……中々運命的じゃないか。赤い糸は血で色付けされていたようだ」

皮肉げに鼻を鳴らす。歪んだ顔を白髪の間から覗かせる。

「俺の最奥にある褪せたセピア色光景は、今もここに」

一枚の絵画があります。量産されたような絵画です。年月の経過により劣化しています。それを破り捨て、半分をごみ箱に捨てました。さらに、ごみ箱に捨てた部分を新しい紙に完璧に書き直しました。そして、その新規部分と残った半分の半を繋ぎ合わせました。さて、その絵画は無事ですか？

「その褪せた光景は地獄かい？」

聞きなれた声。いるはずのない人物。何時からいるのか。今来たことなのか。それとも最初から？ 聞かれても構わないと彼は判断。弱さを見せれる相手だから。

地獄とは何か。コキユートスカ。トロメアか。無間地獄かもしれない。だが、そうではない。ここで言う地獄とは。

「どうでしょう。でも、苛まれ続け、決して消えないこれは、俺の中では地獄に類似していますね」

そうだ。何も御大層な名前が付けられ、神話や書物で語られるものだけが地獄ではないのだ。苛まれ、消えず、逃げられないものがあるならば、それがその人にとっての“地獄”なのだ。

「目を閉じて、耳をふさいでも」

視覚や聴覚を閉ざした程度では逃れられない。地獄とはそんな軽いものではない。

「恐らく。正気を失つて狂つても苛まれるはずですよ。人間ならば」

人格に、記憶に、心臓に、脳に、クオリアに。刻まれたものが地獄。自己の喪失で失われるだろうか。死ぬまでその光景に呪われている。自己を決定付ける重要なファクターとしての側面を地獄は持っているのかもしれない。

「だが君は違う。どちらでもあるし、どちらでもない。死者であり生者、生者であり死者。まるでゾンビみたいじゃないか。進歩しすぎた医学はこんなモンスターを生んでしまうのか……」

生死の水平線^{ホライズン}。自分で呼吸をしていなくても、心臓を動かさなくても生者となれる。死が小さくなった。

「医者であるならば進歩を喜ぶべきでしょうに……」

進歩の裏側には破壊と退廃がある。だが、それを案じているような口振りではなかった。まるで、その技術そのものがなかった方がよかった、と言っているようだ。

「事はそこまで単純ではないさ。どれだけ綺麗言と御託を並べたつて、生かさないうほうがよかつた命だつて確かにある。一個人の人間としては楽にしてやりたくても、医者としての責務がそれを遮る。気づけば酸素ボンベと点滴を手を持っていて、量が少なくなつたものを入れ替える。時々分からなくなつたさ。果たして、いま私の前にいる人間が生きているのか死んでいるのか。言葉も発しない、動かない、栄養補給をしない、放つ

ておけば死んでしまうような人たち。彼らと君は同じだった」

謳いあげるように言葉を発する。それは事象の再認識を促す。

「まるで今は違うかのような言い方ですね」

声音と内容で大体を察した彼は吐き捨てるように言う。

「ああ、実際違うさ。今の君は少しだけ明るい。どうやら君は良い出会いをしたようだ。ここに来て正解だった。君がいくら否定しようと、これは覆らない。なにせ他ならぬ君が証拠だからね。その中でも湊友希那君との出会いは特別だったようだ……」

反論材料が皆無の彼は一方的な言葉に口を噤むしかない。そんな中、彼がとった行動とは。

「……帰ります」

逃亡。物理的な距離を置くことによるシャットアウト。最も簡単かつ効果が高い方法。脱兎の勢いでこの場を後にした彼を医者は見送った。

「逃避癖は健在か……さて」

呆れを混ぜた声を一つ吐き、冷たい声音に切り替える。

「盗み聞きは感心しないな。君は、どこまで聞いていたんだい？」

隅で銀髪が揺れた。

亀裂

「まあ、こんなところで話していた私たちが全面的に悪いが、それでも盗み聞きは感心しないな。いいかい、情報は金になるんだ」

そう、情報は金になる。戦争などで敵の位置を事前に知ることができれば、それだけで絶大なアドバンテージを得ることができる。どのような情報でも、金になりうる。

「つまり、何が言いたいのかしら？」

だが、友希那には理解できない。いや、今の話の内容は理解しているし、知っている。だが、彼の情報が金になるとは思わなかった、思えなかった。

なぜならば彼は何処にでもいるような一般人なのだ。金になるならない以前に、その情報を求める人物がいらない。

疑問符を浮かべる友希那に女医は理論を紡ぐ。医者として至極真つ当な理論を。その理論の色はクリアホワイト……では、ない。少しだけ、本当に少しだけ感情が色づいている。

「君がここで聞いた話を誰かに拡散しないか、って話さ。別に彼の情報は金にはならな

いが、彼の知られたくない部分に直結する情報だ。弱点と言い換えてもいい。そして私は医者だ。患者の情報は死んでも守らなければならぬ」

「ああ」と女医は言葉を止めた。女医の理論が最後まで行き着いた訳ではない。それは、彼女の逃げ場を奪うための停止。

「私は彼の専属医だから特例で校舎への侵入を許されている。不法侵入ではこの場を切り抜けることはできない」

その証拠にほら、と首からぶら下げている入校許可証をわざとらしく見せる。これにて彼女には医師との対話、或いは話し合いを続ける以外の道を失った。

「別を取って食うわけではないから、大人しく話してくれ。私がしたいのは二次拡散の防止だ。口止めと言ってもいい。私は彼を悪意から守らなければならない」

裏を返せば、彼をそういった何かしらの悪意から狙われているということを示す。思わせぶりの態度、意味深長な言葉使い、捻じ曲がった表現、滅多に見せない人間らしい感情の起伏、ああたくさんヒントはあったじゃないか、と友希那は納得した。

そして、最初に会ったときのこと。

「私はよく覚えている。きつと死ぬまで……いや、地獄に落ちても決して忘れられない。彼と初めて面談したあの日を。」

何もかもを諦めたかのような酷い瞳をしていた。目の粗い鏡で乱暴に磨いたような

荒んだ心だった。何も信じていなかった。死んだ方がずっと楽なのに、義務感ばかりが先行して呼吸を続けてきた。欠落を埋めるように痛みに溺れていた。傷口を広げながら生きていた」

「それを変えたのは、湊友希那、君なんだ。君が変えることができたんだ。『死ぬという結果が決まっている以上、重要なのはその過程と理由。可能な限り苦しみ、誰かの為に命を捨てたい』と笑いながら泣いていた、泣きながら笑っていた。

そんな彼が今では少しだけでも笑う事が出来ている。私はその笑顔を曇らせたくな。だから君には彼に関する情報をこれ以上教えない、教えたくない。医者 of 義務と言ったが、半分は嘘だ。私の医者ではなく人間としての部分が、君に教えられないと言っている」

「だから、この場はこれ以上詮索しないでくれ。一方的すぎるという事も自覚している。私達も最後まで隠し通せるとは思っていない。遅かれ早かれ真実を話さなければならぬということも、ああ充分すぎるほど理解している。だが、君がアレを知るべき時じゃないんだ。だから待つてくれないか、彼が自分のことを好きと言えるまで」

知るべきこと、知るべきではないこと。今までの医師の発言を振り返りながら、生まれた疑問をぶつける。

「それは……晴人がヴァイオリンが辞めたことに関係しているのですか？」

その瞬間、医師が表情を変えた。

「……………ほう？」

底冷えするような声音だった。致命的なまでに色素が抜け落ちていた。だが、ここで退いてなるものかと少しの勇気を奮い立たせ、医師の方へ向く。視線は決して離さず、前だけを見続ける意思。それは花崎晴人が最も嫌う意志力の化け物、光の亡者、その片鱗だった。

「花崎晴人……数年前のコンクールで優勝を果たした非才。先天的な才能の不足を後天的な努力と習練で補っていた、努力の天才。だけど一年前のコンクールには出場しなかった。その話をしたときに晴人は私に本気の殺意を向けた」

今でも思い出せる光景だった。殺意に彩られたあの瞳。だがあの瞳を本当に彩っていたのは殺意ではなく。

「あの子はまったく……ああ、関係あるさ。ヴァイオリンと彼は切っても切れない繋がりが……呪縛があるからね。だが、君の言うコンクールはそこまで関係していない。そのコンクールが起こる前の出来事によって、彼はヴァイオリンを……音楽を辞めた」

話は終わりだ、と言わんばかりに背を向けどこかに向って行く医師。そして。

「ヒントは案外身近に隠れているものさ」

そんな意味深なことを言い、彼女は斜陽の中に消えていった。

目の前の騒がしい光景に彼は重苦しい溜息を吐いた。目の前で言い合いを繰り広げる女子高生と女子中学生。言い合いと言っても過激で険悪なものではなく、押し問答のようなものだ。彼がこの場所に強制連行されてから約20分、全く同じやり取りを続けている。

「はあ……」

再確認した事実悲しくなり、もう一度息を吐く。どちらの言い分もある程度理解でき、かつお互いの主張が平行線なので本当に救いようがない。

先ず友希那の言い分だが、Roseliaに入るには技術不足というのが理論のベースとなつている。だが、彼女は目の前で言い合いを繰り広げている少女の技術を実際に見ているわけではない。その技術を見ている時間すら無駄なのだとあらゆる意見を跳

ね返している。

対する少女の言い分は、Roseliaに入る技術を満たしているのか否か、審査をしてほしいとのこと。弛まぬ練習を積んだ証拠に、ぼろぼろのバンドスコアを持っている。一曲だけでも、ワンコーラスだけでもいいから、と。

圧倒的に有利なのはクライアントである友希那だ。最終的には彼女の意思一つで決まる上に、聞く価値がないと判断したならばそれだけで終わる。

そして、彼は個人的に少女の意見が気に食わない。嫌いではない、美しいと思っている、それはきっと正しい。だが、練習するだけで結果が出るわけではない。正しい努力の方向、本人の精神状態、積み重ねた経験、その全てが揃って初めて結果が出るのだ。

結果は悪かったが努力はしました……馬鹿も休み休み言え。結果が伴わない努力は塵芥だ。結果が出て初めて努力というものは評価される。

だが、彼は同時に思う。少女の美しさを、ただ美しいだけで済ませたくはない。

「ねえ、晴人はどう?」

その問いに思考を一時中断。そのあとに「正気か?」という表情を作って彼女を見る。「部外者の俺に聞くな。Roseliaの問題はRoseliaで解決しろ。それがお前の責任であり、義務であり、権利だ」

自己決定権に類似するものだ。集団の総意は集団で決定する、という当たり前のこ

と。その集団に所属していない彼には口出しすることはできないのだ。

「参考として聞きたかっただけよ。貴方の意見で方針が決まるのはあり得ないわ」

それを承知で意見を求める彼女の瞳はやはり真つ直ぐで……彼では直視できないほど眩しかった。それに彼は「解せないな」と小さく一言。

「ならメンバーと話し合え。俺なんかよりもっと参考になる意見が出てくる。それに水川紗夜がいる。お前と似ている彼女ならば良い意見を出してくれると思うが？」

彼が最も警戒している人物であるが、否、だからこそ信頼している人物の名を挙げる。過去の彼とよく似ている眼をしている彼女ならば、必ず同じ選択をするであろうという推論。歪んだ信頼。

「メンバーの意思は聞いたわ。その上で貴方に聞いているの。貴方だったら彼女をどう扱うのかしら？」

引き下らない彼女に彼は折れ、大人しく考える。

「俺だったら、か……先ずはこちら側の要求スペックを満たしているか否かチェックする。その後は伸びしろの確認」

面白味も意外性も何も無い、有り触れたその他大勢が出すような回答。

「やはり見ないと始まらないのは事実よね……」

「当たり前だ。見ずに判断するのは患者の所業だからな。脳に唯一直結している器官で

見るのが最速かつ最高効率で事を済ませられる」

そう言いながら、彼は右目の表面をゆっくりと撫でる。まるで何かを慈しむように。